

平成23年度 学校改善支援プラン

～全国学力・学習状況調査から見てきた成果・課題と改善の方向性～

これまでの本県の状況



P 1、2

普段の授業で活用する 力をつけよう



P 3、4

学力向上に向けた 学校の取組

●指導改善の検証改善
サイクル ➡

P 5

●練り合いや発問の工夫

●小・中連携 ➡

P 6

学力調査等や高校入試の つながりを生かした授業 改善とは？

国語 ➡

P 7

数学、英語 ➡

P 8

理科、社会 ➡

P 9

次の一手は？

阿部委員長（秋田大学教育文化学部教授）
からの提言と「5つのエッセンス」



P 10



○学力向上等に関する資料

（美の国あきたネット＞組織別案内＞教育庁＞義務教育課）

- ・ みんなで育てる秋田の子ども～全国学力・学習状況調査結果などから～
- ・ “「問い」を発する子ども”の育成に向けて
- ・ 秋田県における全国調査等を活用した取組等について など

秋田県検証改善委員会

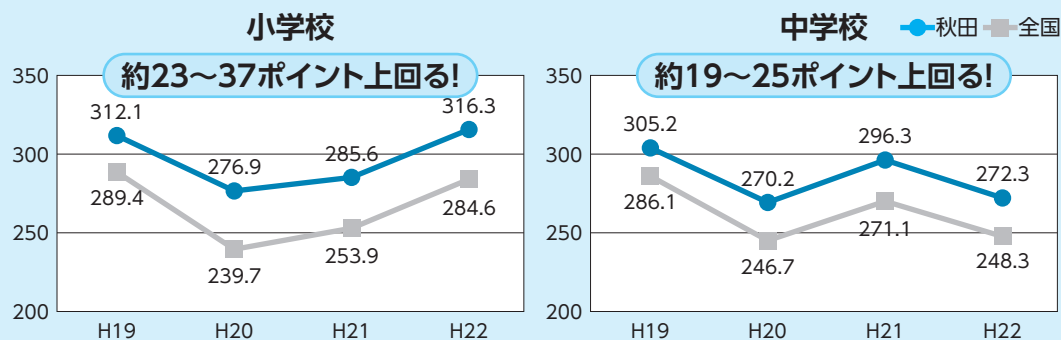
I これまでの分析から見てきた成果と課題

4年連続トップレベルの成績

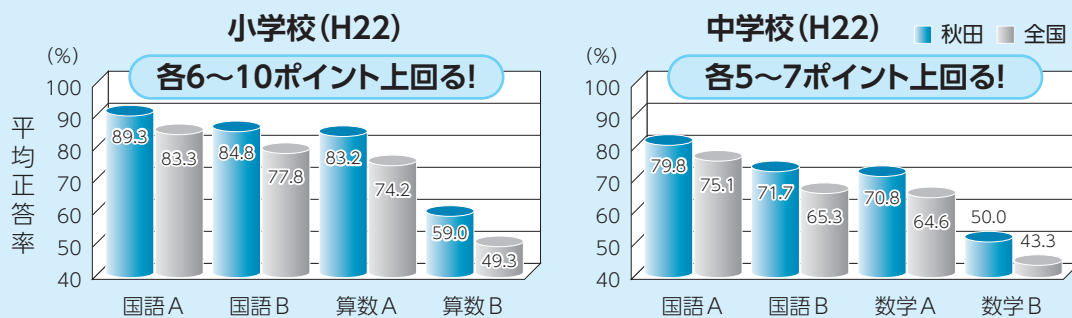
小・中学校の国語A・B、算数・数学A・Bのいずれも全国平均を大きく上回っており、4年連続して全国トップレベルの成績です。

H19～H22全国学力・学習状況調査の各項目(国語A・B、算数・数学A・B)の平均正答率の合計の推移

(1%を1ポイントとして表示)

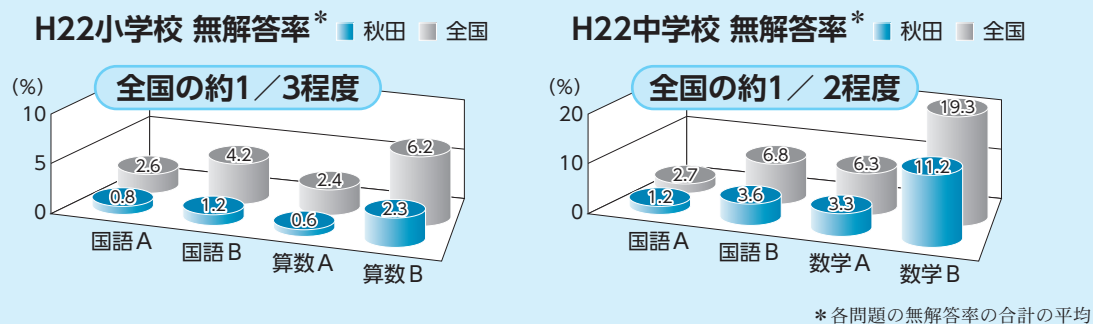


H22全国学力・学習状況調査の本県と全国平均正答率の比較



無解答率からみた状況

小・中学校の国語A・B、算数・数学A・Bのいずれも全国平均を大きく下回っており、**無解答率の低さ**が分かります。これは、**子どもに思考させる場を与え、子どもの考えや意見を受け止め、それを生かす授業**などを行っていることが考えられます。(無解答率とは、その設問を白紙のまま提出する子どもの割合です。)



平成23年度は、東日本大震災の影響により、国の集計結果はありません。ただし、本県では、全小・中学校で問題冊子等が活用されています。

成果の要因

- ◇熱心に前向きに授業に臨む子どもたち
- ◇自分の考えを書いたり話したりしながら、話し合いや意見交換でそれを深める授業
- ◇家庭学習の習慣と丁寧な補充的学習サポート
- ◇起床・就寝時間、一緒に食事をするなど家庭での望ましい生活習慣
- ◇校内授業研究、小・中連携、県や市町村レベルの研究など研修システムの充実
- ◇学校・家庭・地域の多様で豊かな連携

要因につながるデータ

質問紙調査の結果を全国と比較すると、ほとんどの項目で肯定的な回答が多くみられます。特に、次のような項目で安定して高いことが成果の要因につながるデータと考えられます。

【児童生徒質問紙(H22)】

- ・7時前に起きる (小+15.7、中+16.7)
- ・夜10時(小)11時(中)に就寝 (小+12.3、中+ 6.7)
- ・授業で友だちと話し合う (小+ 8.9、中+20.2)
- ・家で学校の復習をする (小+37.2、中+31.0)
- ・間違えた問題を勉強する (小+21.2、中+20.4)

【学校質問紙(H22)】

- ・授業中私語がなく落ち着いている (小+19.9、中+23.9)
- ・学力調査結果を家庭・地域に説明 (小+19.5、中+18.5)
- ・保護者に家庭学習(国語)を促す働きかけ (小+13.2、中+ 7.5)
- ・補充的な学習サポート (小+13.0、中+13.7)

課題(一層の向上を)

「活用」に関わる学力の定着

4年間の調査結果から、各教科における今後の課題は次のとおりです。

- 国語：文章や資料の構成を把握すること。また、文章や資料に対する自分の考えをもち、その理由・根拠を説明すること。
- 算数：図や資料等を基にして、適切に判断したり、考え方の筋道を説明したりすること。
- 数学：事象を数学的に解釈し、成り立つ事柄の特徴を数学的な表現を用いて説明すること（事実や方法、理由等を含む）。

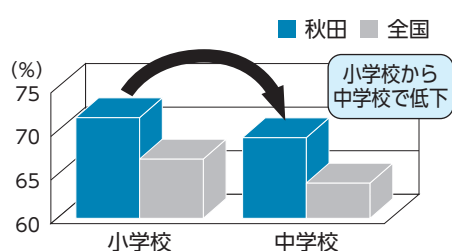
改善するために

授業のねらいを具体的に設定し、言語を重視しながら「読む力」、理由を言葉で分かりやすく「説明する力」や「記述する力」を育てていくことが大切

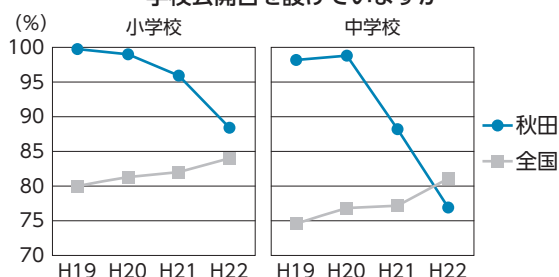
質問紙等から注目したいこと

- 新聞やテレビのニュースなどの関心について、小学校から中学校で低下。
⇒新聞記事を用いた授業をするなど、社会への関心を高める工夫が必要である。
- 「学校公開日」の数値が、平成22年度大きくダウン。
⇒地域や保護者の方々との連携を一層大切にしていける必要がある。

新聞やニュースなどに関心がありますか(H22)



学校公開日を設けていますか



小学校算数 B 1(2)

【出題の趣旨】

日常の事象を数理的に捉え、複数の条件を基に筋道を立てて考え、その考えを数学的に表現することができる。

1

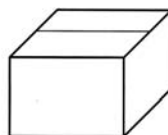
まなみさんとひできさんは、となりの県^アの友だちに、本を宅配便で送ることになりました。
となりの県までの宅配便の送料を調べると、下の表のとおりでした。

となりの県までの宅配便の送料			
荷物サイズ	3辺の合計(※1)	重さ	送料(※2)
60 サイズ	60 cm まで	2 kg まで	600 円
80 サイズ	80 cm まで	5 kg まで	800 円
100 サイズ	100 cm まで	10 kg まで	1000 円
120 サイズ	120 cm まで	15 kg まで	1200 円

ご利用上の注意

※1 「3辺の合計」とは、直方体の箱のたて、横、高さをたした長さです。
※2 送料は、「3辺の合計」の荷物サイズと「重さ」の荷物サイズのどちらか大きいほうの荷物サイズの送料になります。

(2) ひできさんは、下のような箱に本を入れて、荷物を送ります。荷物の「3辺の合計」と「重さ」を調べると、次のようになりました。



【3辺の合計】 75 cm

【重さ】 8.6 kg

上の荷物を送るとき、送料は何円になりますか。答えを書きましょう。

また、その送料をどのようにして求めたのか、左ページの表の言葉と数を使って考えを書きましょう。

普段の授業における留意点

「表の見方の理解」について

- 表に用いられている用語の意味や左右隣り合った欄の関係などについて確認する活動の重視
- 変化や対応のきまり、規則性などを見付ける学習活動が効果的

「数学的な表現」について

- 筋道立てて説明できるよう、表に矢印や数値などを書き込む活動の重視
- 見付けたきまりや規則性を説明し伝え合う学習活動の重視

中学校数学 B 1(2)

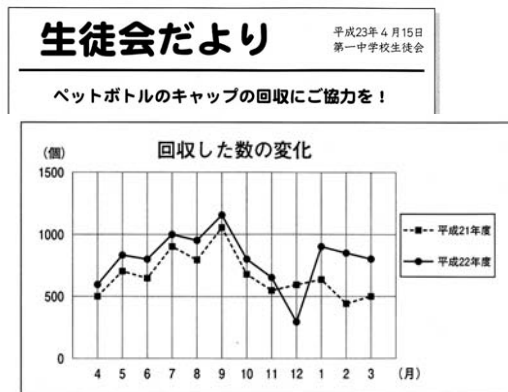
【出題の趣旨】

与えられた情報を読み取り、問題解決の方法を数学的に説明することができる。

1

生徒会役員の友美さんは、ペットボトルのキャップの回収について全校生徒に知らせる生徒会だよりの下書きを作成しています。

生徒会だよりの下書き



(2) 生徒会では、キャップを1個ずつ数える作業が大変だったので、今年度はおよその個数を工夫して求めることにしました。

キャップの入った回収箱の重さが分かっているとき、キャップ1個の重さがすべて等しいと考えれば、キャップのおよその個数を求めることができます。そのためには、キャップ1個の重さのほかは何を調べてどのような計算をすればよいですか。下のアからウまでの中から調べるものを1つ選びなさい。また、それを使ってキャップのおよその個数を求める方法を説明しなさい。

ア 空の回収箱の重さ

イ 空の回収箱の体積

ウ 空の回収箱の高さ



普段の授業における留意点

「情報の読み取り」について

- 資料に示されている言葉の意味を問いかける場を設定することが大切
- 生徒が考えた式などの意味を学級全体で考えることが大切

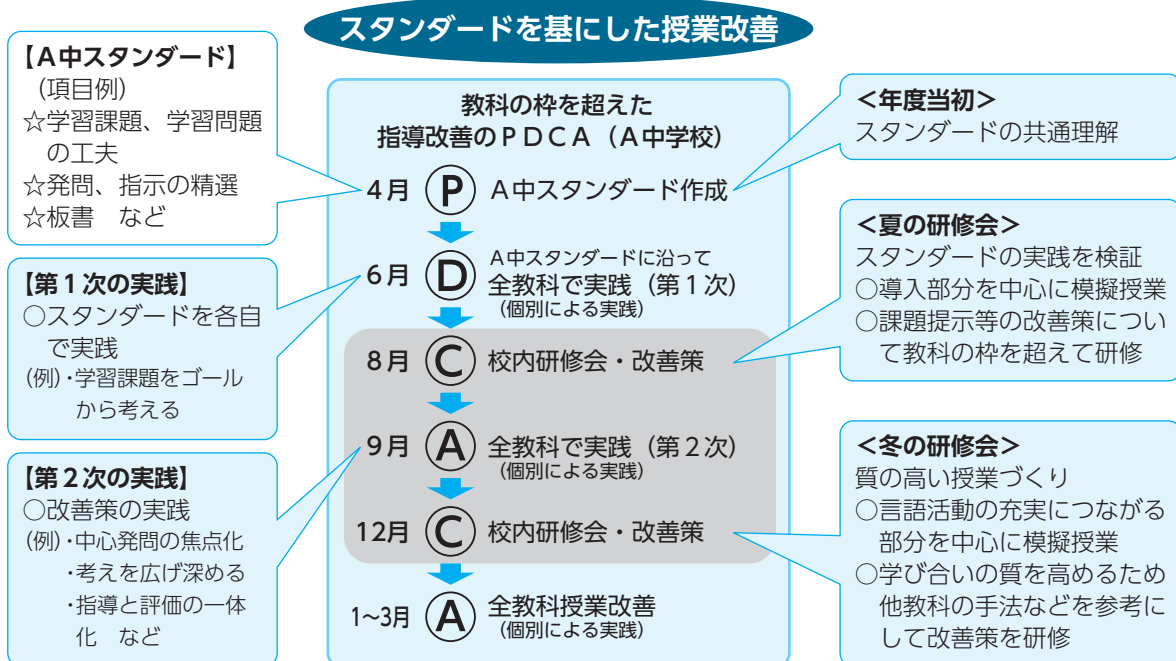
「解決の方法を数学的に表現する力」について

- 推測したり見いだしたりした数や図形の性質などについて表現する場を設定することが大切
- 判断したことやその妥当性について根拠を明らかにして筋道立てて説明し伝え合う活動の重視
- 解決過程に沿って順序よく説明したりする学習活動の重視

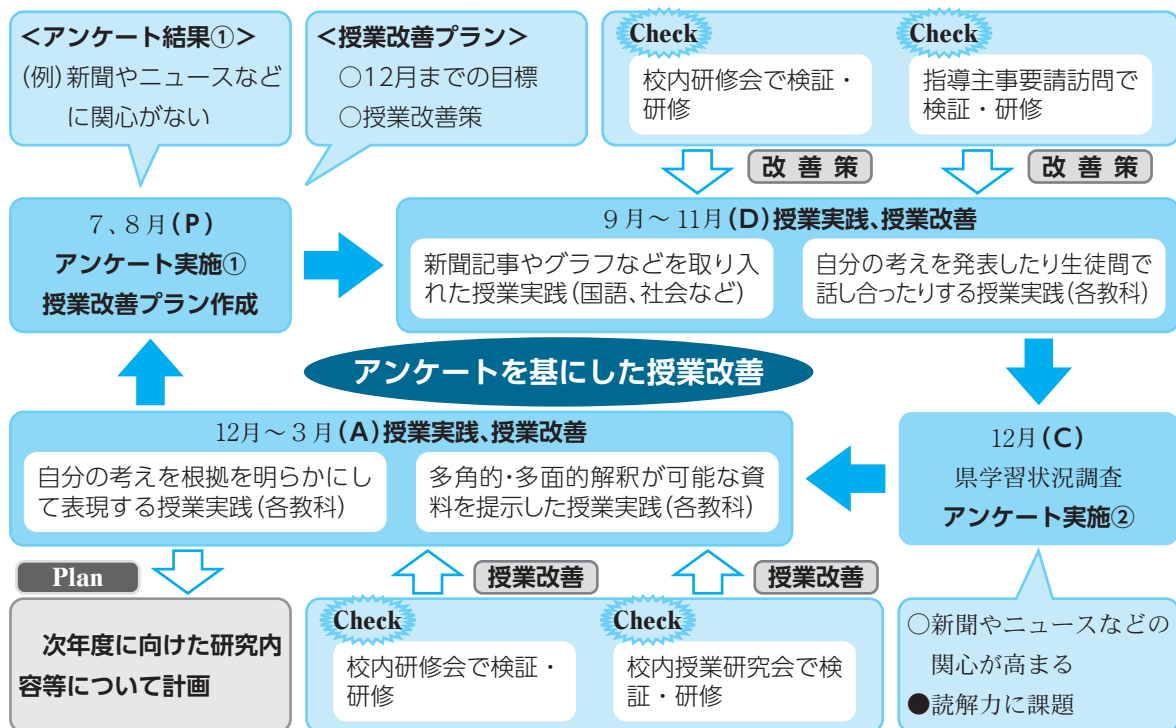
Ⅲ 学力向上に結びついた取組事例

指導改善の検証改善サイクル

A 中学校では、授業を構成する基本的な事項を洗い出して「A 中スタンダード」を作成し、「あきたのそごから」（県総合教育センター作成）のエッセンスも取り入れ、全校体制で校内研修会を実施するなど組織的・計画的な取組をしています。



B 中学校では、通常の P D C A サイクルの他に、年 2 回の「生活・学習に関するアンケート」結果を基にした P D C A サイクルを確立し、各教科ごとの授業改善プランを作成して学力向上に取り組んでいます。



授業改善（練り合いや発問の工夫）

C 小学校では、授業のねらいを達成するため、必然性に基づいた練り合いとなるよう「**練り合いの型**」を学習過程の展開部分で活用し、その型に適した教師の発問等について研究しています。
（* 社会科の調査等で有効な「分類型練り合い」もあります）

「型」を使うことで期待される効果

教師

- 発問力の向上
- 発表を組織化するコーディネート力の向上

子ども

- 対話する力の向上
- 自問する力の向上



子どもの思考力の向上

練り合いの型

型	尊重型練り合い	順位型練り合い	集約型練り合い	*
ねらい	○見方や考え方の独自性に気付き、さらに深める など	○計算の手順、技能や表現、考え方の有効性に気付く など	○考えの共通性から、方法や考え方を一つにまとめ理解する など	
発問要素	○考えの理解を深めさせる ○考えの特徴に着目させる など	○考えの相違点に着目させる ○有効性から、考えを順位付けさせる など	○考えの共通点に着目させる ○総合や結合を促す発問 など	
発問等の例	○～さんの考えを聞いて気付いたことは何ですか。 ○～さんの考えと自分の考えとの違いはどこですか。 など	○どの考えが、正しく速く簡単に答えを出せますか。 ○なぜ、～さんの方法がよいと思ったのですか。 など	○それぞれの考えで、似ている点はありませんか。 ○まとめられた考えが本当に正しいか考えてみましょう。 など	
授業場面	○国語では、登場人物の言動から心情等を読み取る場面などで効果的	○算数では、どの式の表し方がより簡単で分かりやすいかを練り合う場面などで効果的	○理科では、結果から考察したことについての妥当性を検討する場面などで効果的	

小・中連携

D 地区では、小・中 6 校が連携して授業研究会に参加し、「**授業改善 3つのポイント**」を基にして学校や教科の枠を超えて授業改善を進めています。

E 中学校区では、国や県の調査結果等から**共通課題**を洗い出し、それを基に中学校区における**共通実践事項**を設定するなどして授業改善を進めています。

小学校 4 校、中学校 2 校

指導案の事前送付

○必要に応じて指導主事にも相談

事前研究会

授業

○成果と課題
○次時への提言

ワークショップ型研究会

○共有と蓄積

改訂版指導案の作成

事前・事後の充実

学校・教科の枠を超えて

○事前研究会からワークショップ型研究会まで他校からも参加

○3つのポイント
①導入の工夫
②学び合いの充実
③終末の工夫

【大学との連携】
○理論的基盤の提供
○コンサルティング

小学校 3 校、中学校 1 校

小・中連携会議
(年 6 回)

●学習習慣づくり
●表現の特徴を捉える指導(国語) など

全国調査や県調査、アンケート等の分析

共通課題の洗い出し

分かる授業づくり

県調査で検証

4 校共通実践事項

○学習意欲が向上
○表現に関して深く理解
○叙述に沿った読解が向上 など

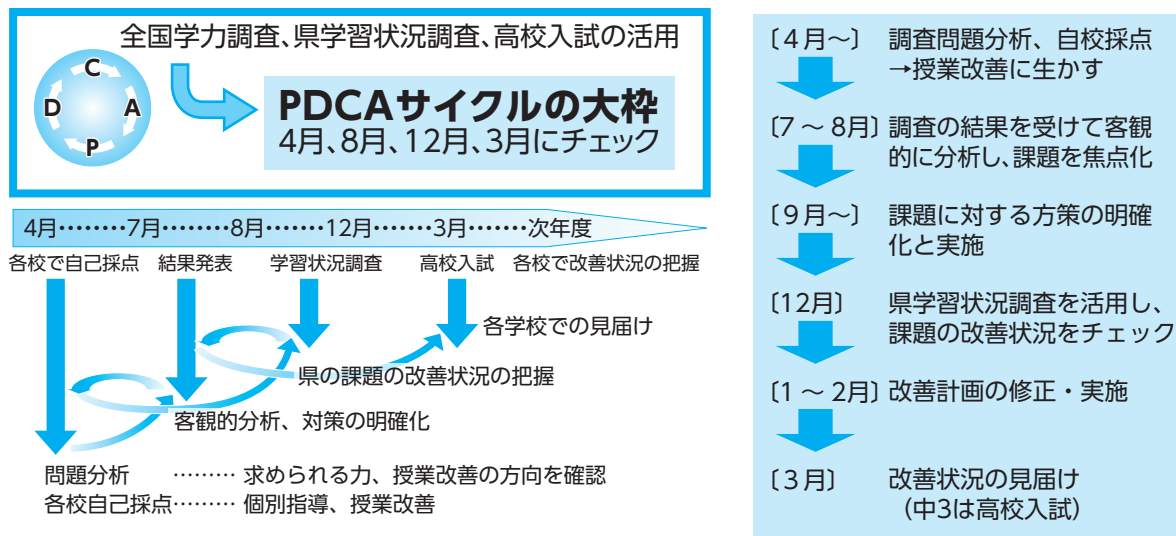
○学習習慣系統表の活用
○文章構成や表現のよさに着目させた指導
○学び合う場の意図的な設定 など

市校長会(月 1 回開催)

○各校の課題と取組を情報交換
○効果的な研修等の情報交換

Ⅳ 全国調査－県調査－高校入試を一体として捉えた検証改善

本県では、全国学力・学習状況調査と県学習状況調査、高校入試を一体として捉えた教育における継続的な検証改善サイクルの確立を目指しています。諸調査等には、各教科で身に付けさせたい力などを問う問題が出題されています。



検証改善サイクルの例

全国調査（小学校）と県調査（小学校）のつながり（国語の例）

【国語】：＜出題の趣旨＞ 表現の特徴に着目して読み、自分の考えを深めることができる。

【H22全国調査 小6・B 3二 抜粋】

【H23県調査 小5 (13 抜粋)】

二 丸山さんの発表を聞いた福島さんは、――部「なぜ、このように角度が急になっているのだと思いますか」について「聞き手に問いかけたところがよかった」と言いました。なぜ、問いかけるとよいのか説明しましょう。

4 この文章では「約170倍」や「約100年分」など、もともとなる量と比べた数字が使われています。この表現にはどんなよさがありますか「読者に」という書き出しに続けて書きなさい。

【発表原稿】

発表の仕方

ウ

この屋根の角度は、急になっています。雪が多い地方では、このような屋根の家が見られます。雪の多い地方では、このように角度が急になっていると思います。

3 丸山さんは、自然とくらしについて調べ、【写真】を撮りました。【発表原稿】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【話し手】の工夫・効果

話し手の「発表の仕方」の工夫・効果」を捉え、評価する問題

【読者】の工夫・効果

読者の「読み手」の工夫・効果」を捉え、評価する問題

説明に具体的な数値を入れた場合の効果を考え評価する問題

文章や発表の内容を理解するだけでなく、文章の書き方の工夫や効果、発表の仕方の工夫や効果を評価する学習が大切なんだ。

「話し手」や「書き手」の工夫を発見し評価する学習、「聞き手」や「読み手」(読者)を意識しながら話したり書いたりする学習が大事なんだ！

発表

◇◇◇全国調査(中学校)と県調査(中学校)、高校入試のつながり(数学の例)◇◇◇

【数学】：＜出題の趣旨＞ 筋道を立てて考え、事柄が一般的に成り立つ理由を説明することができる。

【H22全国調査 中3・B 2(2) 抜粋】

健太さんの予想

連続する3つの奇数の和は、3の倍数になる。

健太さんの予想は正しいといえます。予想が正しいことの説明を完成させなさい。

説明

n を自然数とすると、連続する3つの奇数は、 $2n-1, 2n+1, 2n+3$ と表される。

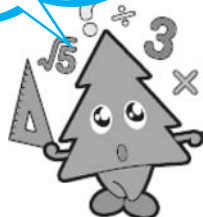
したがって、それらの和は、

$$(2n-1)+(2n+1)+(2n+3)$$

=

目的に応じて、自分の考えを文字式で表現し、説明できるようになることが大切なんだ！

友達の考えを途中まで示し、残りの部分を学級全体で考えたり、教師があえて示した誤答例などを学級全体で議論したりするなどの学習活動が効果的だよ。



【H22県調査 中2(14) 抜粋】

孝さんの予想

連続する3つの偶数の和は、6の倍数になる。

孝さんの予想は正しいといえます。予想が正しいことの説明を完成させなさい。

説明

n を自然数とすると、連続する3つの偶数は、 $2n, 2n+2, 2n+4$ と表される。

【H23 高校入試 2(3) 抜粋】

【美咲さんのレポート】を完成させなさい。

【美咲さんのレポート】

1から9までの自然数から選んでもらう数をA、

3けたの自然数をB、

AとBの和からBの各位の数の和をひいた結果をSとする。

3けたの自然数Bの百の位の数をa、十の位の数をb、一の位の数をcとすると、

◇◇◇県調査(中学校)と高校入試のつながり(英語の例)◇◇◇

【英語】：＜出題の趣旨＞ 文のつながりや構成を考えた文章を書くことができる。

【H23県調査 中2(17) 抜粋】

12 あなたが今年の夏休みに家族や友達としたことを一つ取り上げて、そのことについて文のつながりをもたせて3文以上の英文で書きなさい。(17)

授業の中で基本的な語彙についての知識を「身に付ける」段階から、「運用できる」段階にすることが大切なんだ！



【H23高校入試 2(4) 抜粋】

2 (4)あなたは将来どんな仕事をしてみたいですか。下の《条件》にしたがって、その理由も含めて書きなさい。

《条件》

・次の出だしに続けて、その後を英語15語以上で書くこと。

I want to ...

・文の数はいくつでもかまわない。

・符号(, . ? ! など)は語数に含めない。

テーマについてヒントとなる語句や表現及び文章構成を示すなどして、段階的に書く練習を積み重ねることが必要だね。

◇◇◇県調査(小学校)と高校入試のつながり(理科の例)◇◇◇

【理科】：＜出題の趣旨＞観察・実験の結果から考察したことを表現することができる。

【H23高校入試 1(2) 抜粋】

圧力の概念を理解した上で、実験結果から菓子ぶくろがふくらむことが圧力の変化によることを読み取って表現できるか問う問題

【H23県調査 小5(18) 抜粋】

結果から考えたことを「おしべ」「受粉」という科学的な言葉を使って表現できるか問う問題

〈実験結果〉

簡易真空容器内の空気をぬくと菓子ぶくろはふくらみ、空気をもどすと元の大きさにもどった。

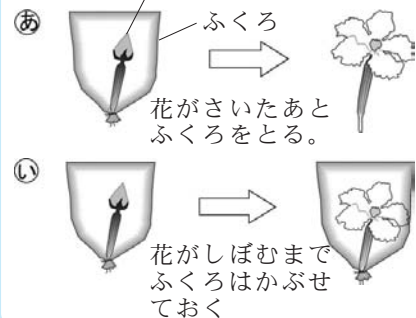


実験で、菓子ぶくろがふくらむのはどのようなときか。「容器内の空気の圧力が」に続けて書きなさい。

実験の結果から考えたことを科学的な言葉や概念を使って表現することが大切なんだ！授業ではキーワードを示すなどして、児童生徒が自分の言葉で表現できるよう工夫も考えられるね。



ヘチマのめばなのつぼみ



②に実ができなかったのはなぜですか。ヘチマの花のつくりがどのようなになっているかにふれて□の中を書きなさい。

◇◇◇本県の重点と高校入試のつながり(社会の例)◇◇◇

【社会】：複数の資料を比較、関連付け、総合するなどして考察し、説明、論述することができる。

資料を用いた教師の「発問例」

- 1 資料を基に学習問題を作らせる。予想させる。
○(下の表を見せて) どうして日本の自動車企業が、ロシアに進出するのだろうか？
- 2 複数の資料を関連付けて読みとらせる。
○(下の図4と図5を見せて) 二つの資料を見ると、ロシアのどんな特徴が見えてくるかな？

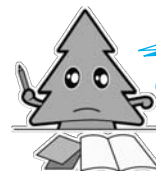
学校教育の指針「本年度の重点(抜粋)」

社会、地理歴史、公民

- ◇社会的事象を比較、関連付け、総合するなどして考察できるよう・・・。
- ◇・・・社会的事象の特色や働きなどを説明、論述、議論する・・・。

【H23高校入試 4(3) 抜粋】

- (3) ロシアに進出している日本の自動車企業の将来計画について、表と図4や図5から読みとれることに触れながら、次の語を用いて説明しなさい。【需要 供給】



複数の資料を比較したり、関連付けたりして説明する能力は、今後ますます必要になってくるよ。授業で大いに実践してほしい！

表 ロシアに進出している日本の自動車企業

	年間の生産台数(千台)	
	現在	将来計画
企業A	50	200
企業B	50	500
企業C	30	100
企業D	160	300

※数字は、2007年～2010年の間に各企業が発表したもの

図4 主な国の国民所得の変化
※2000年を100としたときの指数

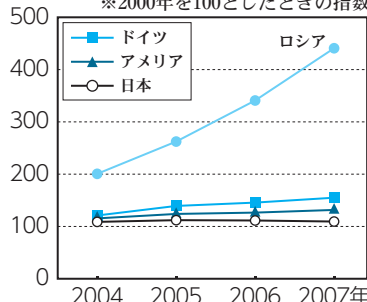
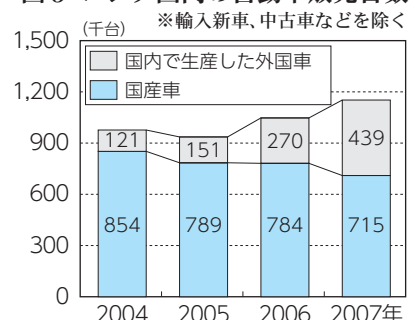


図5 ロシア国内の自動車販売台数



1. 秋田県の教育の質の高さへの自信と誇りを

トップクラスの要因を解明していくと、秋田県の教育の質の高さが様々に見えてくる。子どもの授業姿勢の良さ、主体的に考え書き話す授業、話し合い・意見交換を生かした授業、家庭学習の定着、補習の充実、学校―家庭―地域の連携の強さ、生活習慣の安定などである。

これらは秋田県の地域の安定性、共同体の力とも関わるが、何と云っても秋田県の先生方の指導力の高さ、学校の教育力の高さ、県や市町村教育委員会のリーダーシップの高さによる。上記要因のいずれについても先生方や学校、教育委員会の力なしには実現しない。

まずは秋田県の教育の先進性への自負―自信と誇りを強くもっていただきたい。先進は自らが先を歩いていることに気づかないことがある。それを意識しないまましていると、気がつかないうちにその先進性が失われてしまっているという場合がある。秋田県の教育の先進性を強く意識し、その良さを堅持しつつ同時にそれをさらに伸ばしていったほしい。

2. 専門職として質の高い共同研究を

とは言え、地域や学校による学力の格差、先生による授業の質のばらつきなども存在する。子どもに身につけさせるべき教科内容（学力）を十分意識しないまま話し合いや意見交換をさせている授業、教材研究が不十分なままの授業、子どものつまづきを十分に予測できていない授業、一部の子どものみで教師だけで進行されている授業、ワークシート依存の授業などである。

そういう授業の背景には、必ず共同研究体制の弱さがある。形式的な事前打ち合わせはあるものの研究授業担当の先生が事実上「孤軍奮闘」しているケース、少人数の当該教科の先生だけの事前研究しか行われていないケース、当日の授業研究も互いにほめ合うだけで課題や改善点が見えてこないケース、事後研究（reflection）がほとんど行われないケースなどである。

「PDCA」が注目されているが、「Plan」はつまり事前研究である。授業研究では事前研究が大きな位置を占める。「教科の壁」を超えた豊かな事前研究が重要である。当日の検討会は「Check」にあたるが、これも成果と同時に課題と改善の方向性が見えなければ次の「Action」につながらない。また「Check」「Action」は当日だけでは限界がある。ビデオを見ながらのリフレクション、リライト指導案作成など中身の濃い事後研究は必須である。

そういった授業研究が、いつでも互いに教科を超えて授業を参観しコメントし合えるという日常的な研究につながっていく。専門職である教師にとって共同研究は生命線と言える。

共同研究は、学校間でも是非必要である。小・小連携、中・中連携、そして小・中連携が有効である。中学校区の小・中連携、地域での小・中連携を継続的に進め成果を上げている地域がある。中・高連携研究も始まっている。市内すべての小・中の校長先生、研究主任の先生が月に一回集まり、情報交換や効果的取組を紹介し合いながら学力向上を実現した地域もある。

3. 学校格差・地域格差の改善と「多忙化」改善施策を一教育委員会への提言

地域・学校による学力格差は、「学力を身につける」という子どもたちの権利が侵害され、その状態が固定化しているということである。学力格差を早急に解消する必要がある。まずは格差是正のための教員の「学力加配」を教育委員会にお願いしたい。また、必要な地域に県や市町村の指導主事、教育専門監を重点的に複数回派遣し、授業改善の具体的方策、校内研修のシステムなどについて手厚い援助をお願いしたい。大学教員の継続的派遣も依頼してほしい。

教員の「多忙化」にも積極的に取り組んでいただきたい。実務の肥大化への対策、中学校の部活動の指導に関する先生方の負担軽減などは、授業改善、学力向上に必須と言える。

30人学級実現に向けて全国で様々な行政的取り組みが始まっている。教育先進県である秋田県こそが、全国に先駆けてすべての学年で30人学級を実現してほしい。

トピックス

学力向上フォーラムから（平成24年1月28日（土）実施）

<評価されています>

- 学力調査等を活用したPDCAサイクルの確立
- 成績上位の学校が多い（特に小学校）
- 教育専門監の効果
- 「検証改善委員会」による分析や提言
- ☆授業研究の充実と日常化、小・中連携の推進など

<今後の課題>

- 子どもが他の意見を尊重しながらも、自分の考えに自信をもって発信すること（問いを発する子どもの育成）

大切なこと

次の内容について、確認することができました。

- 全国学力・学習状況調査の活用
- 子どもたち一人一人の成果と課題を把握し、授業改善につなげる
- 県教育委員会、市町村教育委員会及び各小・中学校との連携協力
- 継続的な検証改善サイクルの確立

本県の小・中学校のよさを生かし さらに充実・発展するために

検証改善委員会では、平成19年度から平成21年度までの3年間の全国学力・学習状況調査のデータや事例調査を基に、「安定した成果を示している学校」「課題の改善状況が顕著である学校」がどのような特徴をもっているかを調べ、学力を支える関連因子をいくつか見付け、それらを「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～」としてまとめました。この「5つのエッセンス」は、秋田県内の多くの学校で取り入れられ実行されています。

本県がもつ「強み」を一層充実させるために、各学校において「5つのエッセンス」を活用していただければ幸いです。

一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～

1 学校体制でPDCAサイクルの確立

毎年、効果のある取組を進めている学校では、個々の教職員の力量頼みではなく、組織として検証改善のシステムが確立されています。それがPDCAサイクル〔Plan（計画）→ Do（実践）→ Check（検証）→ Action（改善）〕です。教師全員による専門職としての質の高い継続的な共同研究が大切にされています。

2 全ての子どもたちが積極的に授業に参加できる学校空間

質問紙では、「熱意をもって勉強している」「授業中の私語が少なく落ち着いている」「難しいことでも挑戦する」などが全国トップの結果です。これは、秋田県の教師・学校の丁寧で温かい授業づくりや生徒指導が生み出した結果です。秋田県の特長は、教師一人に任せるのではなく、常に「チーム」で共同して取り組む点です。

3 子どもたちの思考を促し深める授業づくり

本県では、子どもたちが自ら考えることを大切にする授業が多く行われています。また、それをグループで話し合ったり、学級全体で意見交換させたりする授業も盛んです。このように子どもの思考を促し、質の高い試行錯誤を生み出し、相互に深めさせていく授業を実現するためには、教師相互の質の高い共同研究が大切です。

4 自発的学習を生み出すきめ細かな指導

子どもたちに確実に学力を身に付けさせるためには、教師待ちでない自発的な学習を促す指導が大切です。今後さらなる学力向上を期して家庭学習充実のための指導、補充的学習の取組、自ら「問い」を発見することができる子どもの育成等を、学校の体制として継続的に取り組むことが求められます。

5 豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の強い連携

家庭と地域が、強く学校を支持してくれていることが、本県の教育の強みです。子どもたちの授業への姿勢、家庭学習の充実なども、それと関わりがあります。秋田県では、学校から家庭や地域への働きかけ・呼びかけが特に丁寧に行われています。それが、学校・家庭・地域の豊かな連携を生み出します。

平成23年度秋田県検証改善委員会委員等一覧（敬称略）

阿部 昇（秋田大学教育文化学部教授）
橋田 裕（義務教育課長）
田山 義貴（大館市教育委員会学校教育課長）
館岡 和人（潟上市教育委員会総務学事課長）
小坂 晃（由利本荘市教育委員会学校教育課長）
小笠原 晃（大仙市教育委員会教育指導課長）
佐藤 俊之（義務教育課主幹）
武藤 基（義務教育課副主幹）
大塚 久隆（義務教育課主任指導主事）
太田 博史（義務教育課主任指導主事）

小林 寿（北教育事務所主任指導主事）
鎌田 悟（中央教育事務所主任指導主事）
近野 良浩（南教育事務所主任指導主事）
高橋 直樹（義務教育課指導主事）
赤川 太（義務教育課指導主事）
安田 和人（義務教育課指導主事）
工藤 真弘（義務教育課指導主事）
佐藤 真弓（義務教育課指導主事）
土倉 新也（義務教育課指導主事）